

破獄

吉村昭



新潮文庫

は
破

こく
獄

新潮文庫

よ - 5 - 21



昭和六十一年十二月二十日 発行
昭和六十三年十月二十五日 八刷

著 者 吉 村 昭 あきら

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

業務部(〇三)二六六一五一

電話 編集部(〇三)二六六一五四〇

振替 東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛て送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・憲専堂製本株式会社
© Akira Yoshimura 1983 Printed in Japan

ISBN4-10-111721-7 C0193

新 潮 文 庫

破 獄

新 潮 社 版

破

獄

昭和十八年四月十日、東京市と近郊の桜は満開になった。花は、例年よりつきがよく風に散ることもなかったが、上野、愛宕山をはじめ桜の名所に人の訪れはなく、自転車走らせたり徒歩で往きかう者たちが眼をむけてすぎるだけであった。

開戦後、連戦連勝を告げていた新聞記事やラジオのニュースは戦局の膠着化をつたえ、それについてガダルカナル島からの撤退によってアメリカ軍が反攻に転じた気配を報じていた。また、軍事同盟を締結していたドイツの連合国軍に対する優位にもかげりがさしはじめ、ソ連領内に進攻したドイツ軍機甲部隊が、スターリングラードで敗北したこともつたえていた。戦局の推移にともなって、食糧をはじめ日用必需品は配給制になっていたが、配給のとおどおる物が多く、経済統制は強化されていた。商店はほとんど店をとじ、人々は、軍需工場に通って夜おそくまで働いていた。そうした中で花見をする者などなく、桜の花は人の知らぬ間に散った。

中旬以降、気象状況は不安定で急に気温が低下し、十八日の朝には珍しく霜がおり、手押しポンプの井戸の水が凍るといふ騒ぎがあった。が、天候は回復し、二十一日には強い高気

圧が張り出し、全国的に快晴になった。

二十三日の夕方、巢鴨すうがもの東京拘置所の正門の鉄扉てつびがひらかれ、護送車が走り出た。車は、護国寺前をへて不忍通りしのばずをすすんでゆく。人通りは少く、時折り自転車がすぎるだけであつた。

春日通りかすがをすすみ、湯島の坂をくだって広小路に出ると、車は人気ひとけのない上野駅の前でとまった。すでに夕闇ゆふぐみが濃くひろがっていた。

護送車から看守の制服、制帽にサーベルをつけた五名の男が出てくると、浅黄色の囚衣をつけた小柄な男を石畳の上におろした。駅前には、拘置所から連絡をうけていた上野署の私服の署員が数名待っていて、看守たちとともに囚人を警察官詰所の奥にみちびき入れた。かれらは囚衣をつけた男を取りまき、無言で立っていた。

上野署員たちは、囚人が十分な警戒を必要とする者だと連絡をうけていたが、あまりの物々しい護送方法に驚いていた。通常、囚人一人の護送には看守二人がつくのが常で、上野駅まで電車できて、車が使用されることはほとんどない。さらに、看守の中に看守長の肩章をつけた者がまじっているのも異例のことであった。

やがて、署員の一人が列車の発車時刻がせまったことを告げ、看守たちは、草履をはいた囚人を取りかこんで詰所を出た。旅客たちは、看守や私服の署員たちにかこまれて歩いてゆく囚衣の男に、おびえと好奇の視線をむけていた。

二カ月前、戦時輸送措置として貨車による軍需物資、客車による兵員の輸送力を増強する

ため、一般旅客の客車の大幅削減がおこなわれていた。そのため客車はいずれも超満員で、乗れぬ者も多かった。特に長距離列車にその傾向が強く、青森行き急行も日に五本にへらされていたので、その一つである午後七時発の列車もデッキにまで人の体があふれていた。

制服の警察官がデッキのかたわらに立っていて、看守にかこまれた男を車内にみちびき入れた。洗面所裏の座席四つと便所裏の通路ぎわの二席が警察官によって確保され、男は洗面所裏の奥の席に坐らされ、看守たちはかれをかこむようにして腰をおろした。通路にひしめくように立っている旅客たちは、口をつぐんで囚人をひそかにうかがっていた。囚人の坐った側の窓の幕は、おろされていた。

発車ベルが鳴り、列車はホームをはなれた。囚人は三十五、六歳の青白い角ばった顔をした男で、電燈をまぶしそうに見上げ、眼をしばたいた。体つきに比較して、肩幅が異様なほど広がった。男は、物憂げに眼をとじた。

列車は常磐線經由で、冴えた星の散る夜空の下をすすんだ。看守たちは二人ずつ交替で仮眠し、他の者は、窓ぎわに頭をもたせて眼をとじている男を見まもっていた。

夜があげた頃から下車する客が多く、通路で立っている者も少なくなった。朝の陽光はまぶしく、空は晴れていた。

護送日の決定について、天候のことが留意された。悪天候の場合、護送途中で不慮の事故がおこることが懸念され、中央气象台に問い合わせた。その結果、二十一日から少くとも二十六日夜までは、殊に関東地方から東北、北海道地方にかけて好天という回答を得た。その

ため二十三日夜に出発したのだが、空に一片の雲もなく、气象台の予報通りであった。

午前七時四十六分、列車は青森駅に到着した。プラットホームには青森刑務所の看守長が看守二名と待っていて、港湾警察官詰所の宿直室に案内した。そこで、刑務所側で用意した朝食の弁当と茶が供された。

休憩後、男は、看守と警察官にかこまれて連絡船に乗った。船室の一郭が確保されていて、男をとりかこんで五名の看守たちが車座になって坐った。

ドラが鳴り、船は岸壁をはなれた。海上はおだやかで船の揺れもほとんどなく、四時間半後に函館港に入った。岸壁には函館少年刑務所の所員が、夕食用弁当と茶を用意して待ち、一行は、それを受けとるとすぐに発車する函館本線の列車に乗った。沿線の樹林の中には、雪がひろがっていた。

日が没し、列車はすすんだ。男は眠りつづけていたが、看守たちは夜を徹して男を監視していた。

翌朝八時四十五分、列車は、終着の網走駅に到着した。プラットホームにおりると、刺すような冷気が体をつつみこんできた。市内は厚く雪におおわれ、空は青く澄んでいた。

出迎えの看守にみちびかれ、一行は、白い呼気を吐きながら駅の通用口を出ると、護送用のトラックに乗った。トラックは低い家並の間をぬけて、両側に田のひろがる雪道をすすんだ。

やがて、堀をめぐらした赤煉瓦の長い堀が見え、トラックは橋をわたると、網走刑務所と

書かれた大きな木札のかかっている正門を入り、鉄扉がとぎされた。

すでに司法省から嚴重警戒の要ありと指示されていた刑務所側では、看守長が待っていて男を獄舎に入れた。獄舎は五棟あつて放射線状に建てられ、その中央に各獄舎が見おろせる高い監視所があり、男は、その一棟の中央の独居房に入れられた。それは、廊下を巡回する看守が最もひんばんにその前を通りすぎる房であつた。

刑務所では、さい果ての刑務所に送られて絶望的になつている入所者の気持をわずかながらもなごませるため、温かい素うどんをあたえることを習わしにしていて、男にも井がわたされた。入所者は例外なく喜んで涙ぐむ者もいたが、男は、無表情にうどんをすすつていた。刑務所側では、たとえ要注意の囚人であるとはいへ、東京拘置所から五名の看守長をふくむ看守がついてきたことを幾分大袈裟すぎると思う者もいた。網走刑務所は長期刑囚のみを收容し、大正五年に破獄事件があつて以来、二十七年間、無事故を誇つていた。その事件は、五名の囚人が喧嘩をよそおつて脱獄をはかり、それを制止しようとした看守二名を殺害、一名に重傷をおわせ、四名は逮捕されたが一名は脱走した。その囚人も、山狩りにくわわつた青年に猟銃で射たれ傷をおつて捕えられ、重傷の看守は、退職後、傷が癒えぬことに失望して自殺した。

刑務所の看守に対する教育は徹底していて、脱走事故をおこさぬ強い自信をいだいていた。司法省からのきびしい警告もあるので、所長命令によつて房に入れた男に手錠と連鎖の足錠をつけるという類のない処置をとつた。しかも、手錠、足錠は、特別に所内でつくられ

た頑丈な鉄製のもので、重さは四貫匁もあつた。

東京拘留所の看守長は、その処置に満足し、部下とともに翌朝五時五十分発の列車で引返していった。

司法省から網走刑務所長に送られてきた男の書類には、青森県生れ、佐久間清太郎、三十六歳、準強盗致死罪による無期刑囚で、脱獄歴二回とするされていた。準強盗致死の犯行をおかした佐久間を逮捕したのは、昭和十年二月に青森県警察部刑事課長に着任した三十二歳の桜井均であつた。

桜井は、就任と同時に前任者と事務引きつぎをおこなつたが、昭和八年春に県下で発生した準強盗致死事件が未解決のままであることを知つた。

事件は、その年の四月八日午前二時頃におこつた。

雑貨商浦川鶴吉方に覆面した二人の男がしのび入り、店内を物色中、隣室に就寝していた養子の由蔵が物音に気づき、泥棒、と叫んだ。男たちは逃げたが、腕力に自信のある由蔵は裸足のまま追いかけて、一人を捕えて組み伏せた。他の男は、共犯者が捕えられれば自分の罪も発覚すると思えたらしく、引返してくると手にした日本刀で由蔵の背中に斬りつけ、組み伏せられた男も下から短刀で刺し、盗んだ手袋とキャラメル数個を落して逃走した。由蔵は、青森衛戍病院にはこぼれ手当をうけたが、右背部から肺臓に達する傷が致命傷になつて六日後に死亡した。

青森警察署の係官が捜査にあたり、由蔵に事件当夜のことを質問した。が、重傷であるため十分な供述は得られず、犯人がいずれもスキー帽にゴム長靴をはき、組み伏せた男は三五、六歳、日本刀で斬りつけてきた男は二十三、四歳と述べただけであった。

現場でのただ一つの手がかりは、残雪にしろされていた二人の足跡で、浜田村道を青森刑務所の方向につづいていたが、人通りの多い本通りで消えていた。署員は聞込みその他の調査をおこなったが、手がかりをつかむことができなかった。

事件後、三カ月ほどたった頃、強盗事件が県下につづいておこるようになった。賊は、深夜家にしのびこんで金品をあさり、家人が眼をさますと、

「おれは憲兵だ」

と叫び、家人がひるむすきに逃走するという大胆な犯行をかさね、憲兵強盗と俗称された。やがて、六十一歳の男が、深夜張りこみ中の警察署員に逮捕され、犯行を自供した。取調べにあたった係官は、雑貨商の養子由蔵に重傷をおわせて逃げた二人組の男の足跡が消えたのが、ただ一軒建っている男の家の前であることに注目し、雑貨商養子傷害致死事件と男をむすびつけた。

きびしい追及がおこなわれたが、男は、養子殺しについては頑強に否定し、犯行を裏づけるものも見いだせず、強盗罪のみで起訴され、前科もあったので十年の判決をうけ、横浜刑務所におくられ服役した。警察署では、自白こそ得られなかったが、男が養子殺し事件の犯人であるとみる者が多く、養子殺し事件の捜査を打ちきった。

新任の桜井刑事課長は、憲兵強盗と称された男の調査内容を検討した結果、養子殺し事件とは無関係であると断定した。

桜井は、自分の手で事件を解決したいと考え、先入観念にとらわれぬよう当時の捜査員から話をきくこともせず、第一歩から捜査に入った。

まず、殺された由蔵の養父浦川鶴吉の家におもむき、鶴吉から当夜の事情を聴取した。鶴吉は、事件を曖昧に処理した警察に強い不信感をいだいていたので、桜井の訪れを喜び、質問に答えた。しかし、その話からはなんの手がかりも得られなかった。

桜井は現場にもゆき、残雪に二人組の足跡がつづいていたという地を歩き、それが消えた場所には憲兵強盗と称された男の家があることも知った。

かれは、捜査をすすめるながら、十件近くつづいておこっている土蔵破りと関連があるのではないか、と考えた。それは、大地主の家の堅牢な土蔵の錠を日本刀でえぐりつつ扉をひらき、高価な物品をうばう事件であった。使用した日本刀は刃がかけてしまっている。現場に捨て、しのびこんだ土蔵から新たな日本刀を持ち出して次の犯行に使うという手口であった。現場に指紋はなく、手袋をはめて犯行をかさねているものと推測された。

桜井は、雑貨商の養子傷害致死事件も土蔵破りも日本刀が使われていることから、土蔵破りの犯人を逮捕すれば、事件解決の糸口がつかめるかも知れない、と考え、捜査員を投入して犯人の検挙に力をそそいだ。

その年の夏、岩手県警察部から盗品のうたがいの濃い物品の照会があった。それは金、銀

をつかつた櫛、簪、手鏡などで、盛岡市内の質店に幼児をつれた男が質入れしたが、質店の主人が、男には分不相応な品物とうたがい、ひそかに盛岡警察署に通報し、男は署員に連行された。が、男は盗品であることを否定し、曖昧な供述をしているという。照会をうけた青森警察署でしらべた結果、県下屈指の大地主の別荘の土蔵から盗まれた品々で、娘の嫁入り道具の一部であることがあきらかになった。

男が土蔵破りの犯人であることはうたがいの余地がなかったが、桜井刑事課長は困惑した。都道府県の警察署間では、管内で検挙した者は、その地の警察署の権限として処理するのが習わしになっていた。それは広域捜査を不可能にしていたので、司法省訓令によって、要請があつた場合には他の地域の警察署に犯人引きわたしをするよう指示されていた。それも、指名手配の届出の出されている犯人にかぎられていた。

盗品を質入れして連行された男は、青森県警察部から指名手配されていたわけではなく、当然、岩手県警察部で取調べをうけた後、土蔵破りの罪で送検され、判決がくだされることになる。そのようなことになれば、二年四カ月前におこつた養子傷害致死事件の手がかりをつかむことはできず、事件は迷宮入りになるおそれがあつた。

桜井は、岩手県警察部刑事課長板橋長右衛門と面識があつたので、電話をかけて事情を説明し、男の身柄引きわたしを要請した。全国最古参の刑事課長で雅量のゆたかな板橋は諒承し、自力で検挙した犯人を他の県に引きわたしことに反対する盛岡警察署員を説得し、桜井に身柄を受けとりにくるようつたえた。

桜井は、すぐに係官数名を盛岡警察署におもむかせ、留置中の佐久間清太郎二十八歳を列車で移送、青森警察署に留置した。その間、佐久間の身辺があらわれたが、かれは、幼い頃両親に死別して親戚にあずけられ、成人後、魚を売り歩き、ついで店をかまえて豆腐商をいとなんでいた。魚を売っていた頃は値段が安く、豆腐も他の店より大きいので、周囲の者からは誠実な商人として好感をいだかれていたという。家宅捜索もおこなわれたが、すべて処分したらしく盗品は発見されなかった。

桜井は、ただちに県警察部刑事課の取調室で佐久間を訊問し、佐久間は連続的に土蔵破りをおこなっていたことを自供した。ついで桜井は、日本刀を使用するという手口から養子傷害致死事件についてきびしく追及した。が、佐久間は頑強に否定し、自白に追いこむ証拠もないので取調べは空転した。

桜井は断念しかけたが、二人組の犯人がのこした残雪の上にしるされた足跡から、手がかりをつかむことができるかも知れぬ、と思った。足跡は、現場から憲兵強盗と称された男の家の前までつづいていた。犯人たちは、そこから本通りに出て逃走したことはあきらかだが、深夜であったので目撃者はいなかった。しかし、足跡の消えた場所の家に住んでいた憲兵強盗と称された男が、残雪の上を走ってきた二人組の男たちを見た確率が高いと考えられた。前科のある人間の特性として、他の事件について述べることを避ける傾向が強く、目撃していながら口をつぐんでいるとも推測された。

服役中の男を青森市まで呼び寄せることは至難のことであったが、桜井は、青森地方検事

局主任検事に事情を説明し、要請した。主任検事は、それを容れ、手続きをとって男を列車で護送し、十二月二日夜、青森刑務所柳町支所に移監した。

翌日、桜井は、県警察部刑事課取調室で男を訊問した。男は、青森市へ移送された理由を知らず不安そうな表情をしていたが、二人組の男を目撃したか否かを問うと、目撃してはいないと述べ、なおも追及したが答は同じであった。

桜井は、自分の推測がはずれ、唯一の手がかりもうしなわれたことに失望した。服役中の男をいつまでも青森市にとどめておくことはできず、横浜刑務所へもどすことになった。

男が立ちあがり、看守と署員にとまわられて取調室の外に出てゆく。桜井は、入口に出て支所へもどってゆく男を見おくった。

廊下を取調室にむかって歩いてくる佐久間が、男とすれちがった。桜井は、佐久間の顔からかすかに血の色がひくのを見た。無表情な佐久間の顔に、初めてあらわれた表情らしい表情だった。

取調室に入って椅子に坐った佐久間は、落着かぬような眼をしていた。むかい合って坐った桜井は、しばらくの間黙って佐久間の表情をうかがっていた。桜井は、佐久間の内部になにかがおこっていることを敏感に察していたが、それがなんであるかはわからなかった。

かれは、煙草をとり出し佐久間にあたえて火をつけ、自分も煙草を手にした。

「どうだ。ここらでもう話をしたら……」

かれは、おだやかな口調で言った。